

## ニラのネギアザミウマ防除における 薬剤散布ノズルの種類と散布量の評価

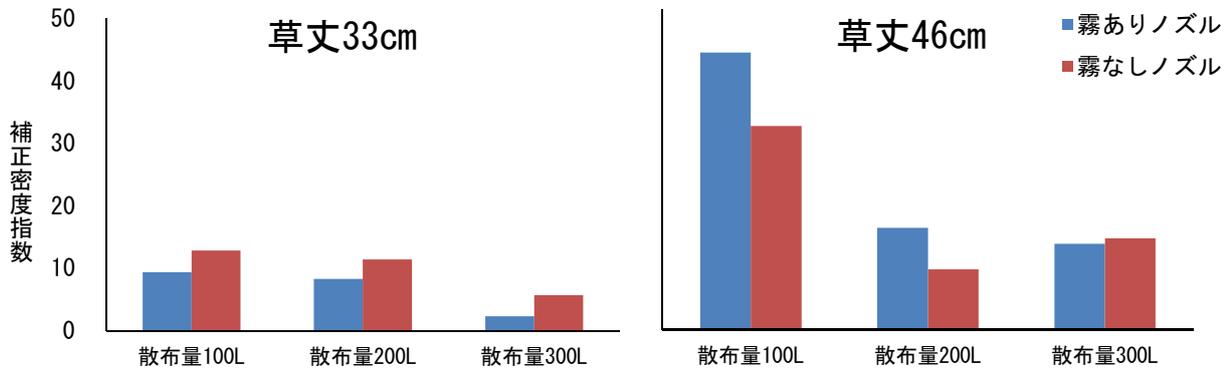


図1 ニラでのネギアザミウマに対する防除効果

注1) 草丈は薬剤散布時点の平均値

注2) 補正密度指数とは処理後の無処理の密度を100として密度を比較するもので、数字が小さいほど防除効果が高い



図2 霧ありノズルでの散布



図3 霧なしノズルでの散布

ネギアザミウマはニラの主要害虫の一つで、葉を食害するだけでなくウイルス病(IYSV)を媒介することで品質の低下を引き起こします。ネギアザミウマはニラの葉先から葉鞘の基部まで、株全体に寄生するため、薬剤防除を行う際には、薬液のかけムラがないようにすることが重要です。

そこで、効果的な散布方法を検討するため、薬液が霧状に噴霧される霧ありノズルと、薬液が大粒状で噴霧される霧なしノズルを用いて、ネギアザミウマに対する防除試験を実施しました。

センター内のガラスハウスで、生育ステージの異なるニラ(草丈33cmおよび46cm)においてハチハチ乳剤1,000倍希釈液を霧ありノズルと霧なしノズルを用いてそれぞれ100L、200L、300L散布しました。

散布4日後にネギアザミウマを計数した結果、草丈33cmのニラでは霧ありノズルの方

が防除効果が高く、草丈46cmのニラでは霧なしノズルの方が防除効果が高い傾向が確認されましたが大きな差はみられませんでした(図1, 2, 3)。また、生育ステージやノズルの違いに関係なく薬剤散布量が少なくなると防除効果が低くなりました。

なお、今回の試験では同じ薬剤を散布したにもかかわらずニラの生育ステージによって防除効果に大きな差が見られました。これは、ニラが繁茂すると薬剤のかけムラが発生しやすくなるため防除効果が低くなったと考えられます。

これらのことから、薬剤の防除効果を十分に発揮するためには、ノズルの種類に関係なく株全体にムラなく薬液をかけることが可能な生育ステージに、十分な量を散布することが重要であると考えられました。

(昆虫担当 田村 悠 088-863-4915)